

序 文

林 宏光¹ 吉岡 邦浩²

画像診断の進歩はまさに長足であり、中でも低侵襲的診断法の開発・改良の現状には、目を見張るものがある。近年の画像診断の目覚ましい進歩を可能としたものは、これを利用する医療機関のみの工夫によるものでなく、また製造企業の力のためだけでもない。作る側と使う側が同じ方向を見つめ、十分なコミュニケーションを取りながら不断の努力を積み重ねてきた結果である。

第48回日本脈管学会総会においては、これまでにない画期的なシンポジウムとして、低侵襲的画像診断装置の開発企業とこれを用いて日常脈管診療を行う放射線科医とがペアになり、超音波、CT、MRI診断法の原理・特性から臨床的な有用性とその限界とを明らかにしたうえで、治療支援画像としての各診断法の持つ可能性についてディスカッションした。加えて更なる診断能の向上と低侵襲化を目指し、今後の開発の必要性や方向性が医療側と開発企業とでかけ離れぬようコンセンサスを得ることに努めた。シンポジウムにおいて、その診断機器の特性を活かしきった最先端の画像を目の当たりにしたとき、異なる次元の、あるいは違うモダリティの画像を見ているような錯覚に陥るほどの衝撃があった。そして治療支援画像として、各低侵襲的画像診断法は着実に進歩していることが実感できた。

本特集号では執筆期間の制約などもあり、3篇の投稿からなっている。三竹論文は超音波装置の開発に携わる立場から、その基礎を平易な表現で理解しや

すく解説してある。基礎を十分に咀嚼せず、高度な臨床応用を行うことは難しい。この点からも知識の整理に大変有用である。猪川論文ではマルチスライスCT (MDCT)開発のトップ開発企業としての立場から、心臓CTの基礎とX線被曝低減技術の現状に加え、最新の320列CTの紹介まで多岐に亘り触れられている。現在心臓CT検査は多くの施設で行われるようになったが、その基礎事項の包括的理解のため一読されることをお勧めする。また飯野論文は最新鋭のMRIを使う立場から、冠動脈MRAの撮像の基礎から診断能、臨床的有用性について、自験例のみならず多くの文献的考察も加えて体系的に記述されている。なかでも32chコイル、3TMRAの画像は、この先のMRIの更なる進歩を予感させるものである。

低侵襲的診断法がまさに花開かんとするこのときに、初めての試みとなる異業種の精鋭達によるシンポジウムの開催をお許しいただいた第48回日本脈管学会総会会長の大橋俊夫先生に、厚く御礼申し上げます。加えてご寄稿いただいた諸先生をはじめとする各シンポジウムの先生方に、改めて心から御礼申し上げます。低侵襲的診断法の進歩はまさに留まることを知らず、一時もこれから目を離すことができない。本シンポジウムを通じて、その進歩が患者にとり有用なものになるためには、この先も互いに手を取り切磋琢磨してゆることが大切であるとの思いが、更に強くなった。

¹日本医科大学放射線医学

²岩手医科大学循環器放射線科